

2024 年度 若手・女性研究者奨励金 レポート

研究課題	木曾義仲を主題とした絵画研究 ー近世合戦図屏風を中心にー
キーワード	①木曾義仲、②近世合戦図屏風、③軍記物語

研究者の所属・氏名等

フリガナ 氏 名	ヤナギサワ エリコ 柳澤 恵理子
配付時の所属先・職位等 (令和6年4月1日現在)	実践女子大学 文学部美学美術史学科 助教
現在の所属先・職位等	公益財団法人遠山記念館 学芸員
プロフィール	2015 年学習院大学大学院人文科学研究科美術史学専攻博士後期課程を単位取得後退学し、同年 4 月より学習院大学史料館助教に着任。任期満了後、狭山市立博物館学芸員、実践女子大学文学部美学美術史学科助教を経て、2024 年 9 月より現職。2021 年に博士論文を学習院大学に提出し、博士（美術史学）の学位を取得。専門は中近世の物語絵画で、特に軍記物語を題材にした合戦屏風について研究を行っている。

1. 研究の概要

本研究は、近世以降に制作された軍記物語の絵画作例の内、『平家物語』に登場する木曾義仲の合戦を主題とした合戦屏風について取り上げたものである。同時期に制作された「一の谷・屋島合戦図屏風」に比べると、木曾義仲の合戦を主題とした合戦屏風は圧倒的に少ない。それゆえにこれまで、全体を概観し、作品相互の関係について考察する研究はあまり成されてこなかった。今回は、現在知られている 8 点の木曾義仲の合戦を主題とした合戦屏風の内、国内にある未見の作例 4 点を調査することを目的とし、さらに、それぞれの作例についてどのような特徴があるのか考察を深めることを目指した。また、近世期に「木曾義仲合戦図屏風」などの作例が制作された背景について、『平家物語』を題材にした謡曲や浄瑠璃の受容についても考察し、屏風の制作と芸能の興隆が関係しているか否かについて探っていった。

2. 研究の動機、目的

申請者はこれまで、日本の中世から近世にかけて制作された“合戦”をテーマとした絵画について、特に軍記物語の絵画を中心に考察を行ってきた。『平家物語』における合戦を主題とした絵画研究においては「一の谷・屋島合戦図屏風」が中心に取り上げられてきた一方で、一の谷と屋島の戦い以外の合戦絵に関しては、十分な議論が成されてこなかったと言える。このことから、現段階で数例が確認できる木曾義仲の合戦を主題とした合戦屏風を合戦絵研究の俎上に載せることで、近世期の軍記物語を題材にした合戦屏風全体の受容の問題にも繋がるのではないかと考えた。特に、木曾義仲は、諸本によっては評価が分かれる人物であるが、従者達との繋がりが強く、人間味溢れる描写が見られることから、物語の中でも人気のあった人物であると考えられる。実際、近世期には義仲をテーマに様々な浄瑠璃が作られ、上演されてきた背景がある。また、従者の一人である巴御前も謡曲や歌舞伎の題材となり、浮世絵や近代の日本画において単体で描かれている。国文学の立場から義仲とその従者達を考察する研

究は多く見られるが、彼らの造形を絵画方面からも探ることで、近世から近代における木曾義仲観、ひいては『平家物語』全体の受容の問題にまで発展させることができるのではないかと考えたことが、本研究の動機である。

3. 研究の結果

木曾義仲の合戦を主題とした合戦屏風について、未見の4点のうち2点を実見することができた。1点は、俱利伽羅神社（石川県河北郡津幡町）が所蔵する「源平俱利伽羅合戦図屏風」である。池田九華という津幡町出身の絵師が描いた幕末期の作例で、書籍などに掲載されておらず詳細が分からない作例であったが、先方のご厚意により特別観覧させていただくことができた。『源平盛衰記』で語られる加賀の武士・井家二郎範方の戦いなどが描かれており、他に類例のない作例であることが分かった。もう1点は山形の最上義光記念館が所蔵する「木曾義仲最期図・屋島合戦図屏風」で、展覧会出品のため特別観覧することはできなかったが、長野県立歴史館（長野県千曲市）で2024年7月13日～8月25日に開催された「疾風怒濤 木曾義仲～文書と絵画でみる義仲の一生～」展で実見することができた。

未見の作例があと2点残るものの、どのような作例か図録等で確認することができたため、現存する8点の木曾義仲を主題とする合戦屏風について、描かれた場面を比較した一覧表を作成した。その結果、『平家物語』巻6の「願書」「木曾最期」を描く作例が多いことが分かった。

さらに、本研究ではそれら8点の作例の内、特に、長野県立歴史館が令和4年に新規購入した長谷川信秋筆「木曾義仲合戦図屏風」（以下、本屏風）を取り上げ、その特徴を探っていった。その結果、本屏風が『平家物語』の「願書」と「実盛」のエピソードを描いたものであり、義仲本人よりも、義仲の参謀である大夫房覚明や幼い義仲を救った斎藤実盛の存在を大きく取り上げていることが分かった。なかでも、斎藤実盛の描写は中世以降の実盛に関する様々な芸能や彼に関する解釈、評価が反映されたものであると推測した。

以上の研究成果は、学会誌『軍記と語り物』第61号に「【資料紹介】「木曾義仲合戦図屏風」について―長野県立歴史館所蔵の長谷川信秋筆本を中心に―」という形で公表する予定である。



長野県立歴史館で開催された展覧会
「疾風怒濤 木曾義仲」

4. 研究者としてのこれからの展望

引き続き木曾義仲の合戦を主題とした合戦屏風の研究を進めていきたい。合戦絵は絵師が分からない作例が大半だが、本研究で取り組んだ長野県立歴史館の「木曾義仲合戦図屏風」は「長谷川信秋」という絵師の名が伝わっている作例のため、今後は長谷川派の制作した合戦絵を中心に考察していく。申請者は現在美術館に勤務しており、以前よりも絵画を直接見る機会が増えたため、絵画研究を深めることができると考える。また、所属する美術館にも合戦絵があるため、いずれは自身で合戦絵の展覧会を企画したいと考えている。

5. 支援者（寄付企業等や社会一般）等へのメッセージ

この度は、若手研究者奨励金を受けることができましたことを心より感謝申し上げます。途中で所属先が変わってしまったため、奨励金での研究活動は短い期間でしたが、以前より希望していた俱利伽羅神社での作品調査が叶い、また、長野県立歴史館の展覧会では多くの絵画作例を見ることができました。絵画資料は国内外様々なところにあり、実見しなければ分からないことが多いため、見に行くための旅費が大変かかります。今回の奨励金は、そうした自身の研究活動を心強く支援してくれるものでした。また、手に入れることができた文献や資料も多く、充実した作品研究を行うことができ、学会誌での作品紹介文掲載まで行うことができました。今後も作品調査と考察を重ね、美術史研究者として精進していく所存です。